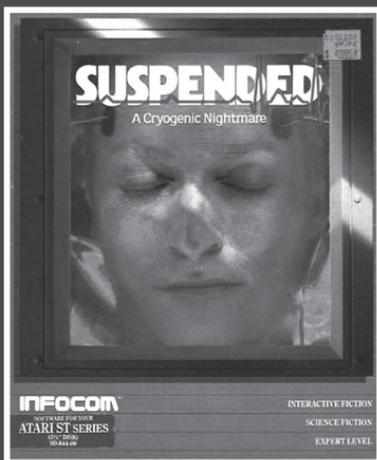


Gamelife ■



Score: 0/0

SUSPENDED: INTERLOGIC Science Fiction
Copyright (c) 1983 by Infocom, Inc. All
rights reserved.
SUSPENDED and INTERLOGIC are trademarks
of Infocom, Inc.
Release 7 / Serial number 830419

FC ALERT! Planetside systems are
deteriorating. FC imbalance detected.
Emergency reviving systems completed.
You are now in control of the complex.

SENSA INTERRUPT: Seismic aftershock
detected ten meters north of Beta FC.
Tremor intensity 3.7. Projected damage:
connecting cables in Primary and
Secondary Channels.

FC INTERRUPT: All Robots, report
locations.

[MORE]

『サスペンデッド』

Suspended: A Cryogenic Nightmare

Infocom, 1983

1.

サスペンデッド

そのコンピューターが登場したとき、ぼくは驚かなかった。テレビを見てそんな予感はしていた。テレビジョンは画面上の絵だった。テレビのあと、言葉がやってきた。エヴァンストンにあるヴィクトリア朝風の古いわが家のねぐらで、『罨にかかったパパとママ』のVCRテープが終わったあと、妹のジュニーは隣でうとうとしていて、両親は上の階にいて、テレビのおしゃべりが終わったことにまだ気づいておらず、ぼくは砂嵐を見ていた。何かが現われるのを待って。七歳だった。十五分後、まだ何もない。二十分後、何もない。半時間後、砂嵐は粉々に砕かれたアルファベットのようにになっていた。それから十分後、最初の文字が見えた。“W”。それは灰色と黒の小さな光の筋の中から不意に浮かび上がり、画面の片隅から反対側の隅に飛んで消えた。

だから、テレビが終わったあとには言葉が出るのだと心づもりしていた。父さんが二階の裏階段脇の狭い部屋にそのコンピューターを置いた。母さんによれば、そこは昔、子供部屋だった。ぼくのひいおじいちゃんが赤ん坊時代をそこで過ごした。ひいおじいちゃんは死に、ぼくは一度も会ったことがない。母さんは、ひいおじいちゃんはきっとぼくのことを考えていると言う。

コモドール64はずんぐりしたベージュ色のキーボードだった。怪しげなコンピューター回路を内蔵したキーボードと小型テレビがトランプ用テーブルにのせられている。ぼくは木の椅子に座った。はるか階下のキッチンテーブルから、余っていたやつを持ってきたのだ。さっきまでテレビだった画面の背後、その少し上あたりに眼をやると、細い窓に夏の

青空が映っていた。言葉に形を結ぶまえの高い雲が、太陽の砂嵐の中で回転している。ぼくはコンピューター画面の初期設定がなぜ青色なのかを理解した。

文を入力する。

-COLOR 2

画面が緑色に変化する。

-COLOR 3

画面が赤色に変化する。

-COLOR 10

エラー

-COLOR 15

エラー

-MAKE CASTLE

エラー

人間がコンピューターについて第一に学ばなければならないのは、あらゆる単語の配列がうまくいくわけではないということだ。人間がコンピューターについて第二に学ばなければならないのは、ほとんどあらゆる単語の配列がうまくいかないということだ。ひとつ深呼吸をして、キーボードを、見知らぬ単語の群れを見おろす。XFK. CRYSTEP. SEPT1HLP. どの組み合わせがうまくいくだろう？ どれがエラーになるだろう？

赤い画面をにらむ。硬い椅子の上で脚の裏が汗ばんでいる。

-MAKE

入力をやめる。カーソルがぼくにしばたたく。つくれって何を？ 両眼を閉じる。何も。エラーはぼくの中にあるんだ！ コンピューターに何を求めているのか、自分でもわかっていなかった。

父さんがぼくを見つけ、キーボードからそっと頭を持ちあげさせると、シャツの裾でぼくの涙を拭い、コンピューターゲームのことを話してくれた。コンピューターゲームというのは、コンピューターにやってほしいことを与えてくれる道具だ。

ぼくが父さんと店で選んだのは『サスペンデッド』。“テキスト・アド

ベンチャー”として知られる、今ではすっかり忘れられたジャンルのゲームだ。開発したのは〈インフォコム〉という会社で、彼らは一九七八年のゲーム『ゾーク』をもって、実質的にそのジャンルを発明した。箱の表は絵になっていて、裏には言葉が書かれている。

耳は聞こえても眼の見えないロボットが……

あなたは停止サスペンドされている。冷凍されており、肉体を動かすことはできない。が、生きている。すべてが自動化された惑星の地下20マイルで。完璧で安全確実な3基のコンピューターが、惑星全土の気候、交通、食糧生産を管理している。あなたは非常事態に備え、そのコンピューター・システムに接続されている。想定外の、ありえない理由によって、コンピューターが故障した場合に備えて。

眼は見えても動けないロボットが……

万一そのありえない事態が起きたら、何か異常が発生したら、可能な限りすみやかにコンピューターを修理しなければならない。なぜなら人々が死んでいくからだ。悪夢と化した楽園の犠牲となっていくからだ。あなたが修理しないかぎり。

感じることはできても耳の聞こえないロボットが……

あなたは動けない。その代わりに、高度な専門技能を持ち、高度なプログラムを施された6台のロボットが手足となって働いてくれる。いずれも従順で役に立つ、個性的なロボットだ。コンピューターは地下施設内で制御されており、あなたは施設の内外に彼らを派遣し、彼らに話しかける。ロボットたちはそれぞれの作業を独自に、ときに協力して進め、進行状況と気づいたことをあなたに報告する。

ロジカルに思考せよ。断固として行動せよ。

その説明はぼくをうっとりさせる。最初から最後まで四回読む。箱をひっくり返して表の絵を調べる。男の巨大な青い顔。両眼は閉じられている。サスペンドされてるんだ、とぼくは思う。

「きみ、いくつ？」

ぼくは少し跳びあがる。話しかけてきたのは店員だ。細縁の眼鏡の向こうからぼくを見おろしている。

「えっと……七歳」ぼくは口ごもる。

彼は首を横に振る。

「このゲームはもっと歳上のプレイヤー用だよ。十六歳以上」

彼は箱を取りあげ、棚に戻す。

「きみがもっと気に入りそうなゲームが隣の通路にある。楽しいゲームがね」

指さされたほうを向いて、呆然としながら立ち去る。十六歳？ 頭の中で計算する。七が十六になるには……九。十六歳になるまであと九年。九年も待てない！

立ち止まり、山積みされている明るい色のさまざまな箱を見る。迷路のゲーム。ベースボール。きわめつきに「セサミストリート」のビッグバードが描かれた箱まで。冗談じゃない。まわれ右する。身を低くして、コンピューターのマニュアルがどっさり積まれた棚を通り過ぎ、さっきの通路に眼をやる。あの店員はぼくに背を向け、ほかの客と話している。『サスペンデッド』の箱にじりじりとにじり寄る。

それでもとにかく、これを手に入れたらどうなる？

父さんに見られているような気がして、はっと振り返る。でも、父さんはカウンターでレジ係と雑談している。九年早くこれをプレイしたらどうなる？ ぼくは考える。たかがゲームだ。危ないことがあるもんか。

これにしよう、と決心する。忍び足で近づき、棚から箱をひったくり、脚がぼくをカウンターまで運んでくれる最大限の速さで歩く。

急げ、とぼくは考える。悪い店員を振り返りながら。

父さんは箱をひと眼見てうなずく。それをレジ係に手渡し、会計してもらう。レジ係はぼくを見るが、何も言わない。

店からの帰り道、父さんがカーラジオをつける。レーガン大統領がイランについて話している。人間が未来に遺せる最高の贈り物は過ちのない世界だ、と彼は言う。

「われわれは過ちを許容しない」とレーガンは熱っぽく言う。

「過ちをなくせ」と父さんがつぶやく。

もうエラーは要らない、とぼくは考える。車窓の外で、巨大な夏のヒナギクが茎のてっぺんでゆっくりと顔をまわしている。道路がぼくたちの足元で、眼のない、耳のない、鼻のないロボットのように振動している。頭上には夏の深い青、群がる飛行機の色。

すべてが変わろうとしている、とぼくは思う。

■

「あなたは めざめました」

フロッピーディスクを挿入し、コンピューターを起動し、ぶううんという音、そしてこの一文、続いて点滅するカーソル。窓のブラインドはおろしてあるが、陽の光輪のへりが羽板の間隙から滑り込んでいる。

ゲームが認識する単語が羅列されたカードを眺める。それは短いリストだ。“報告しろ” “移動しろ” “ボタン押せ”。

「オーダ 報告しろ」ぼくはタイプする。

オーダは聴覚があるロボットだ。

「かたむいた ろうかから かぜの おとが きこえて きます」

ゲームに同梱されていたフルカラーのマップを調べる。

「アイリス 報告しろ」ぼくはタイプする。

アイリスは視覚があるロボットだ。

「こうつう かんりエリアに います。 ぼうそうした エアキャブにより ちひょうで 12000にんが しばうしました。 がめんに そう ひょうじされて います。 ボタンが 3つ あります」

「アイリス ボタン押せ」

「わたしには てが ありません」

「センサより ほうこく」画面を文字が流れる。「エレベーターホール Aの ちかくで さわぎが おきて います」

「オーダ 報告しろ」ぼくはタイプする。

「かたむいた ろうかから あしおとが きこえて きます」

「フィズ 報告しろ」

フィズには知性がある。

「データライブラリーに います。 なにを しりたいですか？」

「なんの足音？」

「いみが わかりません」

「アイリスより ほうこく。 ぼうそうした エアキャブによる ぎせいしゃが 20000にんに なりました。 ボタンが 3つ あります」

「オーダ ボタン押し」ぼくはタイプする。

「ここに ボタンは ありません」

「センサより ほうこく」画面を文字が流れる。「ライブラリーで さわぎが おきて います」

フルカラーのマップを調べる。傾いた廊下はエレベーターホールからライブラリーまで続いている。

「フィズ 報告しろ」ぼくはタイプする。

「フィズは ていしして います」画面を文字が流れる。

「オーダ 交通管理エリアに移動して」ぼくはタイプする。

「よく わかりません」

コマンドのリストを調べ、マップを眺める。

「オーダ 移動しろ 南東」ぼくはタイプする。

「なんとなく むかいます」

「チャンバーの そとの へやから あしおとが きこえる」画面がスクロールする。「ちょうていおんタンクの せいぎよばんを のぞきこむ ひとかげが みえる。 せいめい いじシステムが ていしした。あなたは しっぱいしたのだ」

画面が真っ暗になる。

「なんだこれ？」

数秒後、苛立ちが消え、衝撃を受ける。ぼくは中にいたんだ。ここではないどこかに。どこにいたのだろうと眼をやる。

ひと筋の陽光がコンピューター画面に映る小さな少年の像を横切っている。壁の向こうで夏の風が動く。少年の曾祖父が木の椅子の背後に立っている。眼はなく、耳はなく、手はなく、立っている。



次にプレイしたとき、ワールドを発見した。腕が何本もあって、すばやく動いて、重いものを持ちあげられるロボットだ。ワールド、アイリス、オーダ、センサ、フィズ、ポエット。ポエットは電気の流れを感じられる。七番目のロボットの残骸も発見した。ワールドを交通管理エリアに移動させ、そこで操作盤をいじってエアキャブを停止させた。そうしておけば、地表で人が死ななくなり、ぼくを停止させるべく派遣される部隊の到着が遅くなる。

操作説明書の裏に奇妙なテキストがあるのも発見した。コマンドが書かれたページの次のページに。長さは一パラグラフ分で、このゲームの開発者の紹介文になっている。彼の名前はマイケル・バーリン。〈インフォコム〉のチームにとって、マイケルがどれだけ貴重でクリエイティブなメンバーであるかが書かれている。ものすごい量のコーヒーを飲むとも。『サスペンデッド』の開発に根を詰めすぎて、ゲーム完成後に頭がおかしくなったとも。そのときのぼくには、それがゲームデザイナーのユーモアだとはわからなかった。

「知り合いで頭がおかしくなった人いる？」とぼくはジェイムズに訊いた。

ジェイムズはアイルランドのいところで、夏のあいだこっちに来ていた。ぼくより三つ歳上で、きれいな金髪をしている。サマースクールの女の子たちはみんなジェイムズに夢中だった。ぼくたちは家から数ブロック先の湖岸に腰かけていた。ジェイムズは肩をすくめる。

「おれの母ちゃんがおかしくなった。ドラッグンせいでな」

ぼくはぎよっとする。

「今は大丈夫なんだよね？」

おぼさんとは去年の夏に会ったばかりだ。大きくて、温かくて、悲しげな女の人の。

「まあな、だいぶんまともになった」

「それで……頭がおかしくなると——」

「なんだっていきなしそんなことに首を突っ込みたがる？」

「そんなんじゃない」とぼくは言う。「で、頭がおかしくなるとどうなるの？」

彼は肩をすくめる。

「知らね」

「でも今言ったろ。きみのお母さんが——」

「ひとつだけ教えてやるよ。したら、この話はこれっきしだ。いいな？」

ぼくはうなづく。

「よし、そんなら。頭がおかしくなるとな、まともにしゃべれなくなる」

「まともにしゃべれなくなる。どんなふうにも？」

ひとつの考えがおりてくる。

「たくさんの文を理解できなくなるとか？」

彼はうなづく。

「ほかに？」

「耳がおかしくなる。母ちゃんに十分も話しかけてなのに、なんも聞いてないような感じ」

ぼくは息を呑む。ジェイムズはそれに気づく。

「手はどう？ 手は動かせる？」とぼくは言って、息をつく。

「頭がいかれてるときに？」彼はそれについて考え、「イエス」と言う。「いんや、やっぱりノーだ」

彼は振り返る。ぼくらがお守りすることになっている妹のジェニーが、湖岸で水混じりの砂を滴らせて城をつくっている。

「もひとつ教えてやる。もし内緒にすんなら」

遅くなりつつある。空の交通機関が太陽の巨大な顔を横断している。岸向こうの芝生でヒナギクが動きを止め、湖はうなっている。

「おかしくなったやつらは、そこにはないものが見えんだ」とジェイムズが耳打ちする。

「ほんとに！」

「**中**なんだよ。中が悪くなるんだ。いかれちまうと中が腐る。母ちゃんの話してること、ふつうの英語がわからなくなっちゃうこと、それにあの眼つき。どれも大したことじゃない、ほんとに。でも大事なのは、それが何を表わしてんのか、中で何が起きてるって表わしてんのかってこった」

「中で何が起きてるの？」

「神父さんがおれたちに言うには」とジェイムズは言う。「神父さんが言うには、**母ちゃんの魂に乱れがある**って」

「ポエット 七番目のロボットに触れ」ぼくはタイプする。

「ざんがいの なかに かすかな でんきの うごきを かんじます」

「アイリス 七番目のロボットを見る」

「きょだいな ロボットです。 りょうめは とじられて います」

「センサ 報告しろ」

「7ばんめの ロボットの なかに みだれを かんじます」

「オーダ 何が聞こえる」

「りかい できません」

「オーダ そのロボットを聞け」

「りかい できません」

「オーダ 報告しろ」

「かぜの おとが きこえます」とオーダは言う。「あしおとが きこえます」

■

「ずっとここにいたらなあ」とジェイムズ。

「夏が終わったらあなたはアイルランドに帰るの」と妹が口を出す。

「学校に戻らなきゃ」

「黙れ、ジェニー」

「みんな学校に戻らなきゃいけないんだから」

「ジェニー、静かにして」母さんがステーションワゴンの前部席から声をかける。

ぼくらはスタジオMに向かっている。ジェニーとぼくはセントメアリーという小さなカソリック系小学校にかよっていて、三年生の担任のラーソン先生がスタジオMで一カ月のサマーセッションをおこない、才能ある子供たちに創作活動を教えていたのだ。才能の基準はまちまちで、たとえばジェニーの才能は、ジェイムズとぼくがかよえるなら自分もかよえるはずだと駄々をこねたことだった。ぼくの才能は口パクで、ジェイムズのは書くことだった。

背の低いレンガ造りの校舎が陽光の中でのもの憂げに脈打っていた。ぼくたちはぞろぞろとステーションワゴンから出る。ぼくが最後だ。車から出ると、母さんがあいたウィンドウから手を伸ばし、ぼくのシャツをつかんだ。

「マイケル」母さんの声はうわずっている。

「なに、ママ？」

「しいいっ！」

母さんは二十歩先にある学校のエントランスを窺う。ジェイムズとジェニーがそこからぼくたちを見返している。母さんはぼくを引き寄せる。

「ジェイムズはわたしたちとはいられないの」とうわずった声で耳打ちする。

「えっ」

「ジェイムズはそうしたがるでしょう。ハニー、わたしだってそうできたらいいと思う。神さまはご存じよ、ジェイムズはそうしたがるに決まってる。あの子のお母さんがあんなことになった今じゃなおさら——ちよっと！」

ジェニーが車に駆け寄ってくる。

「それで、なんだって、ママ？」

「なんでもない！」と母さんは大きな声で言う。ジェイムズにも聞こえるぐらいの声で。「楽しんできて、子供たち。二時間後にまた！」

ステーションワゴンは猛スピードで夏もやの中に消える。

「なんの話だったんだ？」とジェイムズが訊く。

「知るもんか」

教室で、ほかの七人の才能ある児童たちと合流する。ラーソン先生が喜色満面でぼくらのまえに立ち、見おろしている。すごく熱心な人で、子供たちの脳に刺したじょうごを通し、時間と空間を超えて自らの表情を投影する才能がある。ラーソン先生が表現しているのは幸福だ。その顔はもっばら幸福とだけ連動している。先生の内部でありえない濃さに圧縮、凝縮された幸福がそこから飛び出し、ぼくらの螺旋の生を通して伸びる。

喜びいっぱいの彼女の表情がぼくらという終点に浮上すると、それは空の星座になる。

先生は最高だ。

「さあ、誰が一番手になりますか？」彼女はうれしそうに歌う。

「ラーソン先生、一番手って？」ぼくらは合唱する。

「クリエイティブな出来事ですよ！」先生は黒板に飛びつく。手には黄色いチョーク。

「先週、クリエイティブな出来事を経験した人は？」

みんなの口からめいめいに答えが漏れると、先生は自分で自分に答え、叫ぶ。

「全員ですね！ みなさん全員がクリエイティブな出来事を経験しました。ニール！」

「ぼくは『カスピアン王子のつのぶえ』を読み終えました」ニールはブロンドで、父親がFBIで働いていて、銃を持っている。「『カスピアン王子のつのぶえ』は『ナルニア国ものがたり』シリーズの一冊です」

「すばらしいわ、ニール！」とラーソン先生が言う。彼女がぐるぐる

と手をまわすと、そのタイトルが魔法の言葉となって黒板に紡がれる。「すばらしい本です！ 本を読むのは創造です！ 読者がいなければ、言葉はしるしにすぎません！ 無です！」

「エラーだ！」ぼくが叫ぶ。

「そうです、マイケル！ そのとおり！ 本はそれだけでは誤りです！ ニールのような読者こそが**創造者**なのです！ ジェイムズ！」

「物語を書きはじめました、ラーソン先生」

先生は立っていられなかった。八歳児用の小さな椅子を引き寄せ、そこに腰をおろす。ぼくらは身を乗り出す。

「ええとどうやら」と先生は消え入りそうな声で言う。「あなたのすてきなアイルランド弁が、この哀れな老いぼれの耳に悪さをしたようです、ジェイムズ。でもあなたは今確かに……いえ！ そんなはずはありません。物語を書き……書きはじめただなんて」

すがるような眼でジェイムズを見る。

「物語を書きはじめました、ラーソン先生」

先生はまっすぐに神を見あげると、スペースシャトルよろしく椅子から発射する。

「でも、読者のいない物語は無ですよ」とニールが不安そうに発言する。「読むことこそがクリエイティブなところです！ 『カスピアン王子』みたいな。そうですよね、先生？」

「書くことは、まだ生を受けていない者と語らうことです。そのお話についてわたしたちに教えてちょうだい、ジェイムズ」

「おれの話は『ファイアフォックス』ってんです」

「ぼくの話は」と先生が訂正する。

「ぼくの話は」彼は続ける。「悪いコンピューターが出てきます。ケーブルを通して悪さをするんです。人を感電させたり」

「それはすごい。もっと聞かせて」

「今んとこ、それで全部です。この極悪コンピューターは電線を通してテレビを爆発させます」

「それからどうなるの？」とエリザベスが訊く。黒髪の、ぼくが好き

な女の子だ。

「どうもなんもあるか」ジェイズが言う。「そっからテレビが爆発して、FBIを呼んで、線を全部引っこ抜いて、悪さしてるコンピューターのありかを突き止めて、電源を落として、新しいテレビを買って、なのにそれはまた起きる」

ラーソン先生の顔から喜びがほとぼしる。

「それはまた起きる」彼女は息をつく。「あらゆる瞬間が唯一無二のもの、あらゆる一瞬がかけがえのないものです。でもそれはまた起きる。これは創造の秘訣です。それは何度でも何度でも何度でも起きる。いいですか！ みなさんは“遍在”という言葉の意味を知っていますか？」

ぼくたちは首を横に振る。

「聖霊はあらゆる場所にいらっしゃるという意味です」静かな喜びが、いつの間にか彼女の顔に宿っている。「子供たち、あなたがたの身にもきっと起きるでしょう。ジェイズのお話で起きたようなことが。めったにない、魔法のようなことが。そして、こう自分に言うでしょう。こんなことはもう二度と起きない。確率はどれぐらいだ？ あなたがたはこう言うでしょう。一生に一度だ。ご両親がそう言っているのを聞いたことは？ ご両親が“生涯に一度の出来事”と言っているのを聞いたことはありますか？」

ぼくたちはうなずく。ディズニーワールドのことだ。

「では、ひとつ秘密を教えます。生涯に一度の出来事はまた起きます。何度でも何度でも起きます。すばらしいことを教えましょう」

先生は両手を握りしめる。けたたましい喜びがその両眼に戻っている。

「生涯に一度の出来事のたびに、わたしが一ドルもらおうとします」彼女は歌う。「ありえないような、信じられないような、二度と起きるはずのない出来事があなたがたひとりひとりの身に起きるたびに、わたしが一ドルもらおうとします。たとえばエリザベス、あなたの身に起きる生涯に一度の出来事のたびに、わたしが一ドルもらおうとしたら……何ドルになるかわかりますか？」

エリザベスは首を振る。

「五兆です」とラーソン先生は言う。「五兆よ。五兆」

■

「アイリス 報告しろ」

「ぼうそうした エアキャブによる ぎせいしゃが 20000にんに になりました。 ボタンが 3つ あります」

「ワールド 真ん中のボタン押せ」

「まんなかの ボタンを おしました」

「アイリス 報告しろ」

「エアキャブの うごきが とまりました」

「ポエット 移動しろ 南」

「がいぶライブラリーに います」

「ポエット 移動しろ 南」

「けんさく たんまつの まえに います」

「ポエット 移動しろ 南」

「セントラルコアの なかに います」

「ポエット 報告しろ」

「パネルの うらがわから とてつもない エネルギーの もつれを かんじます」

もつれは単語だ。ぼくにはわかった。

「フィズ 報告しろ」

「セントラルコアの なかに います」

「使え」

「なにを つかいますか？」

「もつれ 使え」

「いみが わかりません」

「読め」

「なにを よみますか？」

「エネルギーのもつれ 読め」

「いみが わかりません」

「チャンバーの そとの へやから あしおとが きこえる」画面がスクロールする。「ちょうていおんタンクの せいぎよばんを のぞきこむ ひとかげが みえる。 せいめい いじシステムが ていしした。あなたは しっぱいしたのだ」

■

「何回死ねるの？」ぼくはジェイムズに訊く。

「三回だ」と彼は言う。「『パックマン』の話だよな？」

「いや、一生で」

「ああ 彼は考える。「あんまし何回も死ねないとは思うけどな」

「何回？」ぼくは食いさがる。

「ったく」と彼は言う。「ジーザス、どうかしてんじゃねえか」

「え？」

「誰かが死んで、そこから**も一度**死ぬなんて話、どんだけ聞いたことがある？」

「『サスペンデッド』の中じゃ、毎日死んでるよ」ぼくは小声で言う。

「は？」

「『サスペンデッド』さ。『サスペンデッド』の中でいつも死んでる」

「何言ってるんだ。いつも死んでる？ なんべんだ？」

「わかんない」

「おい、マイケル。そのくそ『サスペンデッド』の中でなんべん死ぬるか、当てずっぽでもいいから答えろっつわれたらなんべんだってんだ」

彼の汚い言葉がぼくを不安にさせる。

「知らないよ！」とぼくは言う。「一兆」

彼は両眼を見ひらく。

「**一兆**？」

「どうしても答えろってんならね。そうさ、一兆回」

ジェイムズは感心したようだ。彼は足元を見つめる。何か内緒のことを考えているときにそうするように。アイルランドの父親から電話があったあとにそうするように。しばらくして、ぶんぶんと首を振る。

「ふたりとも頭わりいな！『サスペンデッド』はただのゲームだ。『サスペンデッド』の中で命がいくつあったって、『パックマン』で何機あんのかってのとおんなしこった」

「『パックマン』とは全然ちがう」ぼくは熱くなって言う。「パックマンはそもそも人間じゃないし」

「『サスペンデッド』はただのロボットだろ！おまえが自分でそう言ったんだ」

「ロボット以上のものだ」とぼくは言う。「きみは自分が何を言ってるかわかってないんだ、ジェイムズ。『サスペンデッド』の中には人がいる」

「へえそうかい。誰が？」

「ぼくが！ぼくだよ。ぼくが『サスペンデッド』の中の人間だ」

「なあ、いいか」ジェイムズはぼくを諭す。「『サスペンデッド』ん中じゃ、動くことも、触ることも、見ることも、聞くことも、なんもできない。自分の代わりに全部ロボットにやってもらわなきゃな。そりゃあ人間とは呼べないぜ」

「だからってぼくが人間じゃないってことにはならない」

「いいや、なるね」

その晩、ぼくはベッドに寝ている自分を想像する。それから両手をどこかへやる。オーケー、とぼくは思う、これでシーツを感じることはできない。でもまだ人間だ。それから口をどこかへやる。これで話せない。まだ人間だ。夜に花が閉じていくように、両耳が閉じていくところを想像する。音はしない。でもまだ人間だ。両眼をどこかへやる。寝ている自分はもう見えない。ベッドに横たわっている自分を感じることはできない。何も聞こえない。

ぼくは人間だ、とぼくは思う。一兆回死ねる人間だ。